

# 大通公園を望む窓辺から

## ある国の《蜘蛛伝説》

常任理事 はしもと よういち  
橋本 洋一

私は蜘蛛が苦手であった。中学1年生のときに私の勉強部屋の壁に掛けられた帽子に3cmあまりの大きな蜘蛛が住んでいて、帽子をかぶろうとしたあるときに頭のてっぺんに蜘蛛が乗っかかりパニック寸前まで追い詰められたことがあったため、大の蜘蛛嫌いになっていた。

ある国のある家に一匹の蜘蛛がいた。蜘蛛のねぐらは子供部屋の壁に掛けられた帽子ではなく、本棚の中で身体を休めているときに、クリスマスイブの夜、子供たちに見つかり、しつこく追いかけられた。子供から蜘蛛が本箱に隠れていたとの話を聞き、母親がある国の不思議な蜘蛛の話語りをはじめた。貧しい暮らしであったが、クリスマスツリーはなんとか用意できたのだが、ツリーの飾りをひとつも買えず、飾りのない貧弱な裸のツリーであった。寂しそうな表情をしていた子供を一匹の蜘蛛が本箱から見ていた。

皆が寝静まった頃、蜘蛛は活動を始めた。裸のツリーに自分が作製した糸をせっせと掛けつづけた。翌朝、子供たちが目を覚ますとツリーがキラキラと輝いていた。まばゆい光の中で目覚め、目をこすった。光になれてくると、見たこともないほど素晴らしい光景が目飛び込んできた。ツリー全体が美しい蜘蛛の巣に覆われ朝日を浴びてキラキラと輝いていた。一匹の蜘蛛が作製した糸が本物の金や銀に変わっていたのだ。そのキラキラと輝いているツリーを見て、子供たちは大喜びで満面の笑顔を浮かべていた。

この話に出てくるある国とは、今、戦禍に見舞われ、多くの民衆の命が危険な状況にさらされているウクライナのことだ。ウクライナでは昔から、蜘蛛の糸の形の飾りをツリーに付ける慣習があるらしい。ウクライナの《蜘蛛伝説》が引き継がれているのだ。蜘蛛の糸の飾りを家族団らんで安心して付けられる日が一日も早くウクライナの人々に訪れることを祈念してやまない。



## お伊勢さん

常任理事 すがた ただお  
菅田 忠夫

コロナ禍の前は、ほぼ毎年伊勢神宮に参拝していました。北海道に赴任してくる前は、伊勢神宮のある三重県と愛知県の県境近くの病院に8年間勤めていました。今思うと近鉄特急で1時間半で参拝できたのですが、伊勢と言えば伊勢エビ！ 魚介の美味しい伊勢志摩、牛肉の松阪や、その手は桑名の焼き蛤の桑名一ちなみに札幌のデパートに出店している柿安は桑名の有名なすき焼き店です。など美食にばかり目がいき、勤めている間は1度も参拝したことはありませんでした。

ところが2013年10月に第62回伊勢神宮式年遷宮が行われ、色々な情報を得て、これが訪れることのできる最後の式年遷宮かもとスイッチが入ってしまい、11月に参拝に訪れました。

遷宮の年は伊勢神宮の内宮・外宮ともに新しい白木の殿舎と20年の時を経た旧殿舎が並び、その荘厳さに清らかな気持ちになりました。以後日本の歴史に興味を持ち、伊勢神宮に敬虔な気持ちを抱き毎年訪れていました。

コロナでここ何年も伊勢神宮に参拝できていませんが、そろそろ参拝を再開したいものだと思っています。

私は神戸生まれで小学校の修学旅行で1973年に伊勢神宮に初参拝しましたが、その年は第60回式年遷宮にあたっていました。以後60年を経た2033年の第63回式年遷宮の年に伊勢神宮に参拝することを目標に、日常診療に医師会活動に精進して参ろうと気持ちを新たにしております。どうぞ宜しくお願い申し上げます。また、皆様も是非お伊勢さんに御参拝なさってみてください。